

## なごみの人

先日、母方の祖母の葬儀のため福島に行ってきた。祖母は高齢の割に大きな病気もなく、二日くらい前に入院するまで、野良仕事に精を出すほどの元気さだった。突然といえば突然かも知れない訃報に、僕は仕事を前倒しして、慌てて葬儀に備えた。

祖母は七人兄弟に生まれ、自身は僕の母を含めて六人の子供を産み、孫である自分が生まれた。そのため親戚は多く、僕が小さい頃正月に帰省して、見覚えはあるが名前の知らない人たちが大勢集まっていたことを覚えている。実際、葬儀のとき集まった親戚の系譜をきちんと把握していた孫はいなかったし、そんな話題だけで親族の話は何時間でも続きそうな勢いだった。

僕は、どちらかといえば人が大勢いるような場所は好きではなかったが、小学生の頃、夏休みや冬休みなどの長期休業を利用して、兄弟とともに親戚同士で賑わう福島で祖父母のところへよく帰省していた。祖父母はいつも優しく迎えてくれた。従兄弟と遊んだりするのも楽しく、祖父母の家は居心地がすこぶる良かった。数日間の帰省が終わっても、帰りたくない駄々をこねたり、泣いたりしたことも度々あった。しかし、高校生、大学生になり、社会人になって、今まで十数年間、祖父母の家に行かなくなり、ついには祖父が亡くなったときにも忙しさを言い訳に帰省しなかった。いつしか福島で重ね続けてきた思い出は、まったく更新されないものになっていた。

祖母の葬儀はそんなときの出来事だった。通夜のために集まった夕闇の中で、一緒に遊んでいた従兄弟や親戚の人たちに会った。薄暗さも手伝ってか、十数年ぶりに会う従兄弟たちはそれぞれ成長し、顔もわからない従兄弟もいた。初対面のような恥ずかしさを覚えながらも、幼い頃の面影や癖は変わらないなあ、と思い返した。

祖母は九十三歳という天寿をまつとうしただろうから、僕の中に悲しいという気持ちはそれほどない。勝手な推測だが、多分祖母に悔いはないんだろうとも思う。ただ、告別式から帰ると不思議なくらい祖母のことが頭から離れない。子供の頃の楽しい思い出の後ろにいつも祖母がいたこと、そして、祖母が親族みんなを引き合わせ、大切な日々を懐かしませてくれたこと。ずっと守られているような心地良さは今も生きている。祖母は、誰にでも優しい「なごみの人」だった。